



コロナウイルス感染症パンデミックから2年。ようやく様々な「ふだん」が戻り、今年は2年間途切れていた「早慶レガッタ」が復活し、隅田川にも「春のうらら」が戻ってきた。

隅田川といえば先月に引き続き落語のお話で恐縮だが、滑稽噺の1つに「巖流島」がある。

隅田川の両国橋と吾妻橋の間にあつた。御殿の渡しを舞台に、渡し舟の上で起きる武家と町民の織り成す、すったもんだの物語だが、噺の中で煙草を飲んでいた浪人者が煙管を船べりに叩きつけ、銀の雁首を水中に落とすてしまうくだりがある。

「銀の雁首がツーツと糸を引くように沈んでいく」と表現され、さらにサゲの部分では、中洲に置き去りにされた浪人が渡し舟に向かって泳いできて、

「これ、その方はそれがしにたばかられたのを遺恨に思い、船底に穴を開けに参ったか」と聞かれ

「なーに、落ちた雁首を探してきた」

となるのだが、川底に沈んだ雁首が探せるほど、江戸時代の隅田川は澄んでいたのだろうか。

一時は濁り汚れ、橋を渡るのさえ躊躇させられた隅田川は、東京都の下水道施設が完備され、「早慶レガッタ」が開催できるほどに浄化された。

さて、船といえば、2022年4月23日、連休直前にオホーツク海で発生した観光船「KAZU I（カズワン）」の事故である。

一刻も早く行方不明者が発見され、船体が引き上げられることを祈るが、深海の作業ゆえ、かなり困難なのだという。たった120mと思うが、されど120mなのである。

今いる場所から水平に120mなら、歩くとすると、不動産業界などでは徒歩1分を80mとして計算するので、その基準で行けばたった徒歩1分30秒の距離である。

以前から考えていたことだが、人類にとって横方向の距離感、文明が発展し、交通機関が進化するに連れて急速に縮まり、ちよつとクルマで走れば10kmなどたった15分の距離なのだが、縦方向の距離は果てしなく遠いものを感じる。クルマでたつ

た15分の10kmだが、それは1万m、つまりわれわれ人類が飛行機に乗って旅するときの飛行高度なのだ。

ヒトという生き物にとって、水平方向の距離感と、垂直方向の距離感とはこれほどまでに違うのである。

時として忘れがちなこの事実を、今回の事故で再認識させられたのはいささか悲しい状況ではあるが、人類と文明の無力さを再認識し、ヒトはもつと謙虚でなければならぬと思う次第である。

陸上を歩けば僅か1分30秒の距離に過ぎない距離にある観光船「KAZU I（カズワン）」の船体。

それを引き揚げるには、莫大な費用だけでなく、「飽和潜水」と呼ばれる特殊な手法で深い海中を搜索できる潜水士たちの生命の危険も伴うのである。

一刻も早い、行方不明者の発見と船体の引き揚げを願うとともに、その作業に当たるスタッフの皆さんの安全も祈りたい。

(溪)

前号の48ページ「東京都屋形船協同組合」は正しくは「屋形船東京協同組合」でした。お詫びして訂正いたします。

月刊
公論

6月号 第55巻6号

令和4年6月1日発行 毎月20日発売
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大 中 吉 一 編集人 林 溪 清
発行所 株式会社財界通信社
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラワービル
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616
印刷所 株式会社広済堂ネクスト
取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。